



公募テーマ：

⑤多様なEdTech教材を活用した学習環境下における教育データの利活用の推進

⑩高卒就職市場の多様化/高校・大学の入学者選抜の多様化

# 探究学習を進学・就職につなぐ 制度設計に関する実証実験

最終成果報告書

株式会社Inspire High

## 担当者情報

- 所属・役職：マーケティング・事業開発
- 氏名(フリガナ)：溝口りりか (ミゾグチリリカ)
- メールアドレス：r\_mizoguchi@inspirehigh.com
- 電話番号：080-7023-4892

2024年2月22日



# 最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果

Appendix

# 最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果

Appendix

# 1. 事業者

## 株式会社Inspire High

世界とつながる探究的な学びを手軽に教室で実践できるEdTechプログラム「Inspire High」を開発。  
世界中で活躍する大人たちの多様な生き方や価値観・社会課題に触れ、「答えのない問い」に挑戦することで、自己理解/表現力を養うと同時に、全国の10代と意見を共有することで、他者を知る心も育む。  
主に中学校・高校で「総合的な探究の時間」「道徳」などの授業や、キャリア教育・SDGs教育で活用されている。  
オンラインでの双方向のプログラムとして提供することで、経済的・地理的要因による機会格差の解消を目指す。



プログラム例：

台湾デジタル担当大臣オードリー・タンと考える「社会はどう変えられる？」

詩人 谷川俊太郎と考える「言葉ってなんだろう？」

マサイ族長老と考える「アイデンティティってなんだろう？」

国連職員と考える「平和ってなんだろう？」

失敗研究者と考える「失敗は怖いもの？」

# 最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果

Appendix

## 2. 背景と目指す姿

### 背景

---

探究学習を含む高校での学びが、大学に繋がっていない。探究と進路が断絶されていることで、高校での探究学習の「やらされ感」及び、生徒と大学のミスマッチが生じている。

#### 高校側の探究学習/進路の現状

- ・探究学習が受験に結びつかないことで、結果的に高校での探究学習が、教員・生徒本人にとって「やらされ」で終わってしまう
- ・探究と進路を結びつけるためには、多様な経験や知識が不可欠であり、生徒の納得度の高い進学が、学校や教員に依存してしまう

#### 大学側の入試の現状

- ・生徒一人ひとりの「学びたいこと」と大学/学部のマッチ度を丁寧に見て選考する総合型選抜が現在拡大している
- ・一方、選抜方法の画一性や定性評価の難しさなど、課題が顕在化している

### 目指す姿

---

探究と進路が紐づく入試制度を設計し、生徒が高校で見つけた「学びたいこと」を大学に繋がられ、大学側は欲しい人材を獲得できる仕組みを作る。

これにより、探究学習を経て、深い自己理解と社会とのつながりを感じ、その結果として進路決定に納得感が生まれる。  
また、生徒にとっても探究学習が「やらされ」ではなく、「やるべきこと・やりたいこと」に変わる。

中等教育の探究学習で経験した自分の価値観やコア（主体性の核）が、その後の進学・就職に強く結びつくことで、自分らしい生き方と経済活動が切りはなされることなく、R5年6月閣議決定された教育振興基本計画が謳う「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」が実現される社会を目指すことができると考える。

# 最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果

Appendix

## 3. 実施体制・実証フィールド

### 実施体制

---

事業受託者：株式会社Inspire High  
統括責任者：杉浦太一 (代表取締役/CEO)  
執行責任者：溝口りりか (マーケティング)  
プロダクト検討・開発：干場清裕(プロダクトマネージャー)  
事業実施サポート：小松奈央 (COO)

### 実証フィールド

---

- ・長野県教育委員会
- ・信州大学
- ・学校法人立命館

# 最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果

Appendix

## 4. 実証内容概要

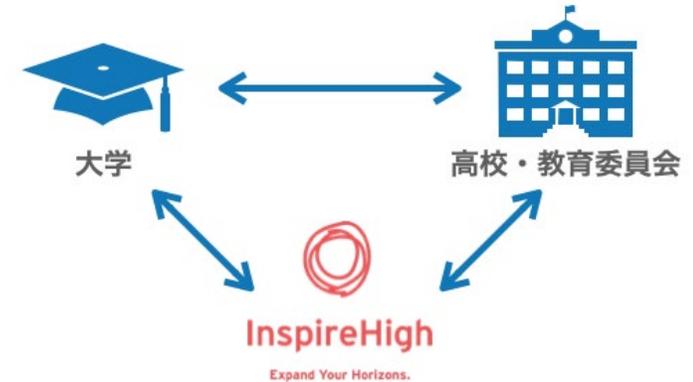
	狙い	取組内容
① 総合型選抜の課題整理	「探究と進路の断絶による、生徒/大学のミスマッチ」の要因として考えられる、総合型選抜の課題を整理し、解決すべき課題を特定する	<ul style="list-style-type: none"><li>• 高校/大学が抱える総合型選抜に関するニーズ・ペインの調査実施</li><li>• 課題の整理及び、本実証にて解決する課題の特定</li></ul>
② 解決策としての入試プログラムのプロトタイプ作成	探究と進路が紐づく入試制度を設計し、生徒が高校で見つけた「学びたいこと」を大学に繋げられ、大学側は欲しい人材を獲得できる仕組みを作る	<ul style="list-style-type: none"><li>• 総合型選抜の課題解決に繋がる、新たな入試プログラムのプロトタイプ作成</li><li>• プロトタイプを元に高校・大学側ヒアリング検証</li><li>• 次年度以降の方針/展開プラン策定</li></ul>

## 4. 実証内容詳細①総合型選抜の課題整理

1. 高校/大学が抱える総合型選抜に関するニーズ・ペインの調査を実施。長野県教育委員会および長野県内の県立高校、信州大学、学校法人立命館、その他Inspire High連携高校を対象にヒアリング。

### 【調査内容】

- ・総合型選抜の現状の仕組み、評価方法、組織体制など
  - ・既存の選考で十分に評価できないと感じる生徒の情報/特性
  - ・入学者と大学/学部 mismatchesを感じる場面はあるか。考えられる要因。
  - ・どのような生徒を求めているか
  - ・求める生徒の獲得における、現状の課題
  - ・入試制度の新設・改善にあたり課題となりそうなこと
  - ・汎用的なポートフォリオの有用性
2. 総合型選抜の課題を整理の上、今回解決すべき課題の特定。Inspire Highの既存事業と関連性を持たせた形で、どの課題解きにいけばいいか社内ディスカッション。方針策定。



## 4. 実証内容詳細②解決策としての入試プログラムのプロトタイプ作成

1. 「①総合型選抜の課題整理」にて特定した課題解決に繋がる、Inspire Highを活用した新たな入試プログラムの検討
  - a. 大枠フレームとプログラム内容検討
  - b. 探究学習の成果をアウトプットできるポートフォリオ作成機能の検討
  - c. 探究成果物を評価するルーブリック案の検討
  
2. 作成したプロトタイプが、高校/大学のペインを解消し、ニーズを満たすものになるかヒアリング検証・残論点整理
  - a. 大学ヒアリング：プログラムによって獲得できる人物像と、求める力の明確化
  - b. 高校教員ヒアリング：ターゲットとなる生徒のペルソナ精度を高め、その生徒が選んでくれるプログラム内容になっているか確認
  - c. 高校生ヒアリング：プログラムでの学びを通して意図した力が育まれるか及び、該当の入試プログラムに興味を示す生徒がいるか確認
  
3. 次年度以降の方針/展開プランの策定
  - a. ヒアリングで明らかになった残論点を元に、今後の方針を策定
  - b. R6年度以降、大学側にどのように展開し、新たな入試制度として本格設置するか検討

# 最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果

Appendix

## 5. 実証結果概要

### 結果

#### ① 総合型選抜の課題整理

- 大学側が求める人材の要素①知識②思考力・表現力③意欲・関心に対する大学の見解を整理。3要素のうち「意欲・関心」は特に学部振り分け前に明確化できることが望ましいが、現状下記の要因により、困難な状況
  - 「意欲・関心」は「思考力・表現力」で装飾可能なうえ、外部者からも添削されており、本質を見抜くことは困難
  - 生徒の「意欲・関心」と大学/学部を適切に紐づける進路指導は、高校側の人員・知見では難易度高
- また上記に加えて、「意欲・関心」を育む経験が、現状の高校教育で不十分かつ、地域や経済状況によって機会格差もある
- 上記に対して、本実証における解決方針を「生徒の『意欲・関心』の育成と『学部』の紐づけを行い、評価が難しい『意欲・関心』を学びのプロセスを経ることで担保する、新たな総合型選抜の入試プログラム設立」と整理

#### ② 解決策としての入試プログラムのプロトタイプ作成

- **特定の社会課題やテーマに対して、Inspire Highのプログラムを活用した探究的な学びを通して、意欲・関心を明確化。**並行して**学部理解を促進し、「意欲・関心」と紐づけることで、納得感の高まった状態で学部を選択・出願**できる、新たな入試前プログラムのプロトタイプを作成
- やりたいことは何となく見えているが、学部選択に課題を感じる生徒に対して、本プログラムが高校の進路指導を補填する点でメリットがある。
- 本プログラムのような取組を各大学に展開できれば、大学が高校の探究学習・進路指導を補填する仕組みの構築に繋がらう

## 5. 実証結果詳細①総合型選抜の課題整理

### 大学の欲しい人材像

現在の総合型選抜では、大学が欲しい人材の要素である①知識②思考力・表現力③意欲・関心の3点が、期待する水準を満たすことが前提。

#### ①知識

左記が優れた人材は一般入試で獲得。総合型選抜では必要条件にすぎず、入学前プログラムで育成可能

#### ②思考力 表現力

総合型選抜の対策塾や学校のサポート等、練習や対策によって得た付け焼刃の表現を見抜きにくいという課題はあるが、既存の選抜でも評価可能

#### ③意欲 関心

自身の解決したい課題と、大学で学びたいことが明確な上で、学部選択が出来ていることが重要。一方、既存の選抜の中ではこのような生徒を見つけることが難しい。

### 入学前後のミスマッチの現状

出願時点で学部選択が存在するため、入学後の③の育成難易度が高い

- ・「なぜ、何のために学ぶか」よりも、「何を学ぶか（学部）」を先行して決定しなければいけない。
- ・学部問わず汎用性がある①②は入学後も育成可能

一方、③を単発のアウトプットで評価する難易度は①②と比較しても高い

そのため、対象学部で学ぶ意欲が継続しない生徒が入学し、大学側が期待する成長と齟齬が生まれている。

## 5. 実証結果詳細①総合型選抜の課題整理

「意欲・関心」の不足による、生徒と大学の入学前後のミスマッチを引き起こす要因を、以下2点に整理

### ミスマッチの要因

- **「意欲・関心」は「思考力・表現力」で装飾可能なうえ、外部者からも添削されており、本質を見抜くことは困難**  
"AO対策の塾も増加しており、自己理解・学部理解の評価が難しくなっている"  
"総合型選抜は、しゃべりがなめらかな生徒が受けるイメージ"  
"現状は学部側が「質」を評価している。学部によって評価基準は異なる"
- **生徒の「意欲・関心」と大学/学部を適切に紐づける進路指導は、高校側の人員・知見では難易度高**  
"一人ひとりの探究テーマと進路を結びつけることが難しい。進路指導の教員が少なく、実質生徒60人を一人の先生で対応することになっている"  
"総合型選抜で受験する約40人に対し、進路担当は1名・生徒の希望分野が様々な中で、担当の知識が足りないことが課題"

※加えて、「意欲・関心」を育む経験が、現状の高校教育で不十分かつ、地域や経済状況によって機会格差がある状況

"高校の探究学習では、生徒が本当に好きなことをテーマに掘り下げて探究できておらず、どうしても大人の求める方向に寄せたテーマになってしまう"

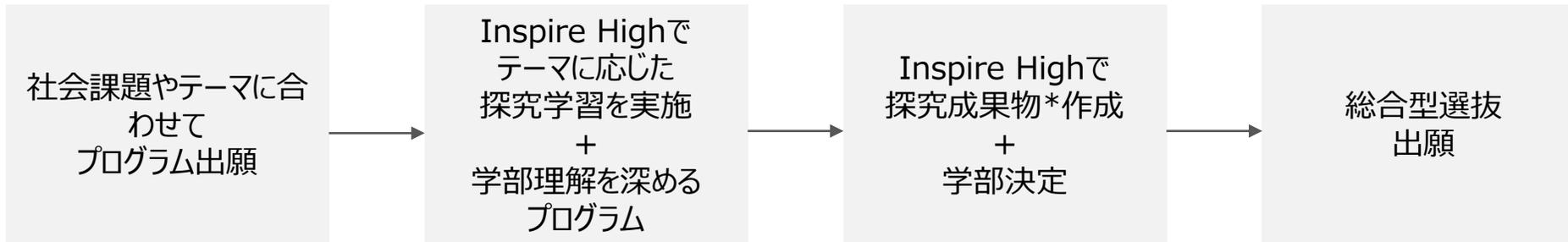
### 本実証における解決方針

左記を踏まえ、評価が難しい「意欲・関心」を学びのプロセスを経ることで育成・担保したうえで、「学部」との紐づけを行う、新たな総合型選抜の入試前プログラムを新設することで、生徒/大学のミスマッチを解消できるのではないか。



# 5. 実証結果詳細② 解決策としての入試プログラムのプロトタイプ作成

特定の社会課題やテーマに対して、Inspire Highのプログラムを活用した探究的な学びを通して、意欲・関心を明確化。また、並行して学部理解を促進し、「意欲・関心」と紐づけることで、納得感の高まった状態で学部を選択・出願できる。



※探究学習の成果をアウトプットできるポートフォリオ機能

探究学習の一連のプロセスを経て、成果物が自動的にアウトプットされる



## 5. 実証結果詳細②解決策としての入試プログラムのプロトタイプ作成

やりたいことは何となく見えているが、学部選択に課題を感じる生徒に対して、本プログラムが高校の進路指導を補填する点でメリットがある。本プログラムのような取組を各大学に展開できれば、大学が高校の探究学習・進路指導を補填する仕組みの構築に繋がらう。一方、具体的なテーマ設計や所要時間は今後詳細を詰める必要があると同時に、Inspire Highのプログラムによる意欲・関心の醸成については、定量データを集計して確度を高める必要がある。

検証項目	明らかになったこと・残論点
<p>ターゲットとなる生徒が実際にいるか。 また、彼らに興味を持ってもらえる＆先生にとって推薦したいプログラムであるか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● やりたいことは見えているが、学部選択に課題を感じる生徒は多い。高校側も生徒を本プログラムに推薦することは、指導工数やミスマッチを減らすなど進路指導を補填する観点でメリットがある。一方、特定大学に閉じず、幅広い大学の入試に繋がると、生徒にとってもよりメリットが広がる。 "やりたいことはあるが、学力や活動が高3時点で足りない生徒もいる。活動は出来ていないけど、使命感はあるから、なんとか他の形で経験を補填して間に合わせたい、という生徒には良さそう" "高2の冬頃であれば、参加したいと思う。大学と探究が繋がっているからミスマッチ減るという観点で安心感がある" "特定の大学の入試にそのまま直結することで、プログラムを経て「これはやりたいことではない」と分かった時、かけた時間のもったいなさを感じてしまう"</li> </ul>
<p>どんな課題・テーマ設定であれば、興味を持つ生徒が多いか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒が興味を持つテーマは様々であるため、生徒軸でテーマを考えるのではなく、大学/学部の欲しい人材や学問領域に沿ったテーマ選定をする必要がある。 "特定のテーマへの偏りはなく、生徒の興味関心は様々"</li> </ul>
<p>プログラムの実施期間・所要時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● プログラムは3年生の6月～夏頃が適切か。一般入試と平行して進められるような所要時間にする必要がある。 "4～5月で部活も一段落つく。夏休みに、一般入試と平行して進められると良い"</li> </ul>
<p>Inspire Highのプログラムが実際に生徒の意欲・関心、使命感の醸成に繋がるか</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Inspire Highのプログラムが生徒の進路に対する意欲・関心の醸成に繋がることは、事例として確認できた。一方、N1データにとどまらず、定量データは調査する必要がある。 "元々社会課題や平和紛争に関心があった。Inspire Highで、アフガニスタンで女子学生のための学校を設立したシャバナさんのセッションに参加したことで自分の方向性がより具体的になり、「農村部の教育機会の提供」に携わりたいと考えるようになった。"</li> </ul>

# 最終報告書目次

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果

Appendix

## (参考) Inspire Highについて

普段出会えない、世界中で活躍するインスパイリングな大人（ガイド）から、多様な生き方や価値観、仕事、社会課題に触れる体験を。経済的、地理的要因問わず、全10代に向けて。



## (参考) Inspire Highについて

1セッションが4つのステップで構成された、約40分のプログラム。  
世界中にクリエイティブな大人たちの話からインスピレーションを得る"インプット"、自分の考えを表現する"アウトプット"、他の10代と意見交換をする"フィードバック"、学びを振り返る"リフレクション"のサイクルを、プラットフォーム上で一気通貫で実施できる仕組み



## (参考) 高校ヒアリング内容 ※一部抜粋

### ①公立高校

- 社会課題に対し使命感を持ち、大学で学びたいことが明確な生徒が実際にいるか。どんな生徒か。どのくらいいるか。
  - 沢山いる。今の通常の総合型選抜に挑む生徒がほぼこれに当てはまる。
  - 大体の生徒が、興味を持つテーマや社会課題に対して、どの学部を選ぶか確度を高め、総合型選抜に挑む
  - そのプロセスのサポートに、現状生徒一人ひとりに教員がついている（教員一人あたり生徒2~4名）
- 彼らが持つ「解決したい課題」について学びを深め、使命感をより強固にした上で、どの学部で学ぶか決断するプログラムがあったとして、そのような生徒が興味を持ちそうか。また推薦したいと思うか。
  - 「（本プログラムを実施している）XX大学に行きたい」という思いがすでにある生徒の場合はイメージが付きやすい
  - それ以外で、「XX大学に行きたいかはまだ決まっていない」という状態の生徒に、選抜方法で大学を推薦することは現状あまりイメージがない
  - このプログラムで1番魅力なのは、学校側の進路指導をフォローしてくれる部分。一方、本来高校側が、生徒の探究（興味関心）と進路をしっかりと結びつけるべき、という考え方を持っているただ、学校ごとに進路指導に差分があるから、高校生の機会格差をなくす、という観点では良いかもしれない
  - 例えば、理学療法士に興味を持つ生徒が、このプログラムを通し、リハビリを専門に学ぶのではなく、実は工学のアプローチもあるかもしれない、と気がつくことができるのはストーリーとしてあるかもしれない
- 推薦したいと思う場合、他の総合型選抜ではなく、このプログラムに推薦したいと思う理由は何か
  - 生徒の指導負担が減る
  - 少子化の流れでどの大学も指定校推薦が増えているので、指定校推薦でこれを実施するのは良いかもしれない  
※大学側は人材を確保できる&高校側は負担が少ないため拡大しているが、それこそミスマッチが起こっている
- プログラムを生徒に推薦する上で、懸念となることは何か
  - 特定の大学の入試にそのまま直結することで、プログラムを経て「これはやりたいことではない」と分かった時、かけた時間のもったいなさは感じてしまう（気づけたこと自体は良いことだが）
- どれくらいの期間、所要時間であれば生徒に勧められるか。またいつ頃からプログラムが開始すると、受験生のスケジュール観点で良さそうか
  - 3年生の6月頃から。4~5月で部活も一段落つき、先生が生徒の状況も把握できるようになる。夏休みに、一般入試と平行して進められると良い。
- どのような課題・テーマ設定であれば、興味関心を持つ生徒が多そうか
  - 生徒が興味を持つテーマは本当に様々なので、あまり気にしなくて良さそう。SDGsなど間口が広くても良い。
- 生徒は、すでに高校で自身の学びたいことに対する探究学習を実施している状態か
  - 正直あまりできていない。生徒が探究学習の中で、自分の学びたいことを見つけられていない
  - ただ、「母が家でヨーグルトを作っている」→「発酵って面白い！」という自分の内側からくる好奇心で調査を進め、学部を選んだ生徒も。
- 高校として抱えている探究学習の課題は何か？それは探究学習プログラムを入試に課すことで解決しようとするか？
  - 生徒が自分の好きなことを探究していないこと。例えば「野球が好き」など、本当に好きなことをテーマに掘り下げて探究できていない。どうしても、大人の求める方向に寄せたテーマになってしまう

## (参考) ヒアリング内容

### ②私立高校

- 社会課題に対し使命感を持ち、大学で学びたいことが明確な生徒が実際にいるか。どんな生徒か。どのくらいいるか。
  - やりたいことは見えているんだけど、学力が足りない生徒は容易にイメージが付く（沢山いる）
  - 例えば、海外青年協力隊に入りたい→高校時代の最初から英語・世界史を頑張って学力上がる+何かしらの活動もしている、となると理想的だが、高3の夏時点で、「海外青年協力隊」に興味生まれる生徒もいる。やりたいことはあるが、高校時代の学力や活動が高3時点で足りない状態。
- 彼らが持つ「解決したい課題」について学びを深め、使命感をより強固にした上で、どの学部で学ぶか決断するプログラムがあったとして、そのような生徒に興味を持ちそうか。また推薦したいと思うか。
  - 推薦したい。やりたいことが明確で、それが高校時代から活動に結びついている（→活動に合わせて学力も上がっている）生徒は既存の総合型選抜でも良いが、そういう生徒は実際少ない。
  - 例えば、海外青年協力隊に入りたい→高校時代の最初から英語・世界史を頑張って学力上がる+何かしらの活動もしている、となるとかなり理想的だが、高3の夏時点で、「海外青年協力隊」に興味生まれる生徒もいる。やりたいことはあるが、学力や活動が高3時点で足りない状態。
- 推薦したいと思う場合、他の総合型選抜ではなく、このプログラムに推薦したいと思う理由は何か
  - マニアではないけれど、使命感はあるから、なんとか他の形で経験を補填して間に合わせたい、という生徒には良さそう（部活動を頑張っていたなどで、やりたいことに紐づく活動が出来ていない生徒）
  - 実際に同じようなニーズの生徒で、先生主導で動画プログラムを視聴させ、探究学習を一通り実施し、総合型選抜に間に合わせたケースあり（理科分野に興味がある生徒）
- どれくらいの期間、所要時間であれば生徒に勧められるか。またいつ頃からプログラムが開始すると、受験生のスケジュール観点で良さそうか
  - 3年生の春・夏頃が良さそう。
- どのような課題・テーマ設定であれば、興味関心を持つ生徒が多そうか
  - 特になし。生徒の興味は人によって様々
- 生徒は、すでに高校で自身の学びたいことに対する探究学習を実施している状態か
  - 実施している生徒もいるが、まだごく一部。探究を本格的にやり始めたのが今の高2
  - 例えば高3で、「香り」のデータ分析を理科の探究で取り組み、そこからある大学の理学部に総合型選抜で合格した生徒いる
- 高校として抱えている探究学習の課題は何か？それは探究学習プログラムを入試に課すことで解決しようとするか？
  - 自分の本当の「好き」をやりきれていない生徒が大半。教員側の課題。
  - 進路指導の教員が少なく、実質生徒60人を一人の先生で対応することになっている→探究と進路を一人ひとり結びつけることが難しい

## (参考) ヒアリング内容

- ③公立高校
- 社会課題に対し使命感を持ち、大学で学びたいことが明確な生徒が実際にいるか。どんな生徒か。どのくらいいるか。
    - 現在、一般が6～7割・年内在が3～4割。総合型選抜は40人程度。その中で、やりたいことが明確で、その分野で高校の学びを一貫して深めている生徒は10名くらい。ただ、社会課題がベースになっているかというそうでもなく、例えばずっと車が好き、設計がやりたい、と考えている生徒が、総合型で長岡造形大学に行くなどの事例もあり。
    - 学年が変わると、自然とやりたいことが変わってくる生徒が多い
    - 総合型選抜は、しゃべりがなめらかな生徒が受けるイメージ。
    - あとは、まさに一般入試では届かないが、「可能性を増やすために受けてみたい」というニーズで受ける。
    - 総合型選抜に生徒を送り込みたいが、9月出願までに準備が整う生徒が少ないのが現状（夏休みから取り組んでいる生徒は間に合う）
    - 総合型選抜で受験する約40人に対し、進路担当は1名
    - 生徒の希望分野が様々な中で、担当の知識が足りないことが課題
  - 彼らが持つ「解決したい課題」について学びを深め、使命感をより強固にした上で、どの学部で学ぶか決断するプログラムがあったとして、そのような生徒が興味を持ちそうか。また推薦したいと思うか。
    - 総合型/学校推薦側にシフトしていかないと、乗り遅れてしまうのではないかという危機感があるため、夏休み前からのプログラムがあれば、推薦したいと思う
  - プログラムを生徒に推薦する上で、懸念となることは何か
    - 一般入試の勉強と両立が可能なのか。どれだけ時間を要するプログラムになるか。
    - 総合型/学校推薦の時期が9～11月。学力的に伸びる可能性があるからもどかしい。
    - 失敗した生徒が、また一般入試に向けて切り替えていく必要がある。
  - どれくらいの期間、所要時間であれば生徒に勧められるか。またいつ頃からプログラムが開始すると、受験生のスケジュール観点で良さそうか
    - 部活や行事が落ち着くのが6月。7月～だと良さそう
    - 高校1年生からInspire Highを活用しているため、高1から余裕を持って（期間の観点で有利に）プログラムを受けられると良い。
  - どのような課題・テーマ設定であれば、興味関心を持つ生徒が多そうか
    - 多いのは、SDGsや、地域課題である人口減少問題
  - 生徒は、すでに高校で自身の学びたいことに対する探究学習を実施している状態か
    - ごく一部。約200名中10%くらい
    - 学年の途中で学びたいことが変わる生徒もいる。（それ自体は良いこと）
  - 高校として抱えている探究学習の課題は何か？それは探究学習プログラムを入試に課すことで解決しようとするか？
    - 大学と結びつける機会が不足している。実際に大学の先生とお話する等、もう少し大学と連携していきたい
    - 1学年240人いる中で、探究テーマが様々。先生だけでの対応が難しい

## (参考) ヒアリング内容

- ④公立高校
- 社会課題に対し使命感を持ち、大学で学びたいことが明確な生徒が実際にいるか。どんな生徒か。どのくらいいるか。
    - やりたいことはぼんやりあるものの、学部選択どうしようかと思っている生徒が大半
    - 200人のうち、総合型選抜20人、指定校推薦で20人。一般比率が多い。その内、探究活動を受験/進路に繋げた生徒は2名くらい
      - カンボジアに行って英語教育のなさに驚き、支援活動のボランティアを行った生徒→英語教育系の大学に進学
      - 養護教員を目指し、「小中高生のカバンの重さが姿勢に及ぼす影響」を探究
    - 200名中15名が、医学・薬学・看護を目指す。この生徒たちはやりたいことが明確
  - 彼らが持つ「解決したい課題」について学びを深め、使命感をより強固にした上で、どの学部で学ぶか決断するプログラムがあったとして、そのような生徒が興味を持ちそうか。また推薦したいと思うか。
    - 今の生徒は忙しい。やってみたら？と推薦して、やるかどうか正直分らない
    - 今の生徒は、自分自身で欲しい情報を手軽に得られるため、Inspire Highのプログラムが適切かは正直不明瞭
    - 「この学部がいいのでは」という学部への結びつきは、早い時期にやりすぎると、逆に選択肢を狭めることになるのでは
  - どれくらいの期間、所要時間であれば生徒に勧められるか。またいつ頃からプログラムが開始すると、受験生のスケジュール観点で良さそうか
    - ・春まで部活動の大会があるため、夏頃から
  - どのような課題・テーマ設定であれば、興味関心を持つ生徒が多そうか
    - 特定のテーマへの偏りはなく、生徒の興味関心は様々。
    - SDGsは多いが、それ以外でも身近な興味関心から探究を進めている
  - 生徒は、すでに高校で自身の学びたいことに対する探究学習を実施している状態か
    - 生徒はそれぞれ学びたいことを探究しているものの、探究と進路が紐づいているのはごく一部（200人中2名ほど）
    - 「探究イコール進路に紐づくもの」「進路のために探究をする」とはしたくないが、「結果として、結びつく場合があったら面白いよね」というスタンス
  - 高校として抱えている探究学習の課題は何か？それは探究学習プログラムを入試に課すことで解決しうと考えるか？
    - 結局調べ学習が多くなってしまふ
    - 大学との提携が少ない

## (参考) ヒアリング内容

### ⑤公立高校

- 社会課題に対し使命感を持ち、大学で学びたいことが明確な生徒が実際にいるか。どんな生徒か。どのくらいいるか。
  - 1学年240名中、年内入試は20名程度。中でも、総合型選抜は6名程度。かなり少ない
  - 自身の学びたいこと「問い」も、探究学習で機会是与えられているが、授業がない状態で生徒から自発的に問いが出てくるわけではない
  - 考える機会を与えられないと、生徒の問いは表に出てこない。埋もれたまま。
- 彼らが持つ「解決したい課題」について学びを深め、使命感をより強固にした上で、どの学部で学ぶか決断するプログラムがあったとして、そのような生徒が興味を持ちそうか。また推薦したいと思うか。
  - そもそも現状、先生から生徒に積極的に総合型選抜を推薦することはしていない
  - 学校として、昔から推薦を推奨せず、一般を重視する傾向がある（年内はある種、楽をする、逃げ、のような考え方も残っている）
  - 事前準備（提出物や面接練習など）が盛りだくさんなため、一般入試一本に絞った方が効率が良いという考え方
  - 自主的に総合型選抜の相談をしてくる生徒はごく一部
  - 現実的に、このプログラムを生徒が「良い」と思うケースは、「合格確度」が上がる時
  - 2年次にある程度このプログラムに目星を付けておいて、3年次に出願するイメージ
  - 入学時に9割が国公立を志望する（結果として半数が国公立に行く）ため、私立前提だと難しい
- どのような課題・テーマ設定であれば、興味関心を持つ生徒が多そうか
  - 前提として、生徒の興味関心があるテーマは本当に様々。年によっても傾向が違う。
- 生徒は、すでに高校で自身の学びたいことに対する探究学習を実施している状態か
  - 探究と進路を直接的に結びつけることは、中々できていない
  - 以前は、探究の時間に、進路・学部の調査などをやっていたが、ここ2年は自分の問いを好きに探究する形にした

## (参考) ヒアリング内容

### 高校3年生 生徒インタビュー

- 現状、大学で学びたいことが明確か。学びたいことは何か。それはなぜか
  - 貧困・教育
  - その他社会課題について、国内外問わず、現地に訪れて学びたい
- 学びたいことが見つかったきっかけは何か
  - 高2のときにフィリピンのボランティアに参加したことが1番のきっかけ
  - ボランティアには、中学のときに、講演会でJICAの人に話を聞いて、実際に自分で見に行きたかったから申し込んだ
  - 毎週違うスラムに行って、炊き出しや子供たちと遊んだり、日本から寄付を持っていったり
  - 実際に現地に行って感じたこと：日本から何を持っていけば良いか分からなかったため、靴や服、文房具を持っていったが、スラムでゴミ山を見た。現地のお母さんと話したときに、現地のお米を寄付したら泣いて喜んでくれた。その時に、せつかくの寄付が無駄になってしまっている現状や、本当に喜んでもらえるものは何かを考えるように。
  - 学校の講演会（国際協力の分野に詳しい大学の教授、NPOでフィリピンやタイでストリートチルドレンの支援を行っている方）も、学びたいことを考えるきっかけになった
  - 学校/クラスで、課外授業が推進されていて、色々な機会があった
- 学びたいことにマッチする大学・学部を見つけられているか。見つけられていない場合、何があれば見つけれそうか
  - 見つけられた
  - 担任の先生が紹介してくれた。説明会に参加して、良いなと思った
  - 貧困について学べるのも一つの理由だけど、立地的にも特色のある大学なので、面白い人達と出会えそうと感じた。海外からくる人が多いのも魅力。
- 現在の高校の探究学習に感じている不安・不満・課題
  - 高校になってはじめて探究をやりはじめたが、最初は探究のステップが分からなかった。自分の興味のあることで、とりあえずやってみよう！という感じだった
  - 問いを見つけるのも難しい
  - 探究はやはり色々な経験がある人が強い。
- 現在の大学受験（特に総合型選抜）で感じている不安・不満・課題
  - 高3のはじめまでは、一般受験も考えていた。両方やるとなった時に時間をどう使うかが難しかった
  - 受験自体は楽しくできた
- 今回のような入試プログラムがあったら、参加したいと思うか
  - 高2の冬とかに見たら、すごく惹かれると思う。大学と探究が繋がっているから、安心感がある。ミスマッチが本当に減る気がする
  - （興味があることをベースに）進む道が見える気がする
  - 自分は高校3年間で探究活動をちゃんとやっていた良かったと感じている
  - 探究活動でアクティブになれた→APUに行くことができた
  - 「貧困」といっても、いろんなアプローチがあるから、まさに自分はそこをこれから考えていきたい

## (参考) ヒアリング内容

Inspire Highの「意欲・関心」醸成および進路に関する影響について（過去ヒアリング結果を再整理）

質問項目	Kさん（当時大学2年生・真宗学専攻）	Yさん（当時大学1年生・人間社会学専攻）	Tさん（当時高校3年生）
<p><b>Inspire Highによる進路や将来への影響・変化</b></p>	<p>大学選びにおいて、Inspire Highの影響を大きく受けた。</p> <p>高校の時は理系志望。公務員や研究職など安定した職業を目指していた。</p> <p>高校の受験期に参加しはじめたInspire Highを通して「やりたいこと」を突き詰めて成功している事例を多く見た。</p> <p>Inspire Highの回数を重ねていく中で「確実な道を選ぶよりも、やりたいことを選択して職にいくこと」のほうが面白そうだと感じるようになった。</p> <p>また、自分がやりたいことについても考えるきっかけになった。</p> <p>人の一生について考えたい、ということに気づいた。「人はなぜ死ぬのか？」という哲学的な問いを大学で研究したいと考えるようになった。（以前は人の死について考えても職業につながらないと思い、専攻にすることをやめた）</p>	<p>元々、広島出身というバックグラウンドがあったため、社会課題や平和紛争に関心あり、ざっくり国際協力に関わりたいと考えていた。</p> <p>Inspire Highで「アフガニスタンの学校創業者」のセッションを見て、教育を受けられない女の子たちのために活動したいと方向性がより具体的になった。教育を受けられない女の子たちの背景には、絡み合う様々な要因があることを改めて気付かされ、「教育機会を得られない状況にいる女の子たち」のために何かしたいと思うようになった。</p> <p>今後は、農村部で教育の機会の場を構築したいと考えている。Inspire Highで「問題の根本とは何なのか？」という問いを考え続け、自分で学びを深める中で、教育格差の問題に気づき、特に途上国の農村部が顕著であることを知った。農村部の人たちが「学びたい」と思うきっかけさえない状況がとても深刻であると感じ、まずはそういう環境をなくすための行動を自分が起こしていきたいと考えようになった。</p>	<p>元々、母親とのカンボジア旅行で、戦争で足を無くした人に出会いカルチャーショックを受ける。将来は発展途上国の人々を助けたいと考えたが、自分にできることのイメージが持てずにいた</p> <p>「アフリカの金融スペシャリスト/社会起業家」のセッションを見て、発展途上国支援にもいろいろな方法があることを知った。</p> <p>「広島で活動するアメリカ人の平和活動家」のセッションを受けて、海外の人も日本で平和活動をしていることにインスパイアされた。</p> <p>戦争の被害の大きかった沖縄という地で平和について学習したく、沖縄の大学へ進学。</p>

## (参考) 各大学の総合型選抜-出願書類内容

総合型選抜で受験した現役大学生にヒアリング

	Aさん（2021年度受験）	Bさん（2021年度受験）	Cさん（2021年度受験）
どのように書類を作成したか。 スケジュールなど。	<p>4-8月：材料集め・整理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元々「ジェンダー平等」という軸があった</li> <li>・その軸に合った自分の経験や考えを、日記を整理して、マインドマップなどを制作した</li> <li>・書きたいことや自分の経験をリストアップして、推薦専門塾の人にアドバイスをもらった</li> </ul> <p>9-10月：自己推薦書作成・校正</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・塾の先生、学校の先生など50回くらいは添削してもらった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書き始めたのは出願締め切りから3週間前。（8月下旬）</li> <li>・志望校、学科は決まっていて、自分の軸は元々あった。</li> <li>・そのときの軸は「発展途上国の教育開発」について</li> <li>・自分と似た志望理由書をリファレンスとして集めた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・志望理由書は1ヶ月前くらいから着手した</li> <li>・校正は10回くらい</li> <li>・先生にアドバイスをもらったがいいアドバイスではなかった</li> <li>・いいアドバイスをもらっていた生徒は、先生が国語科の先生だった</li> </ul>
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日記をつけていたので書く材料はあったが、材料をうまく活かせなかった。</li> <li>・自分のことを深く理解している人じゃないと適切なフィードバックをもらえないと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・偏差値のような受かるかどうかの指標がないので不安だった</li> <li>・他の人の志望理由書など、参考事例を見つけるのが大変だった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・材料集めなどはせず初手から文章作成をしていたが、軸や書きたいことが整理されたリストやマインドマップがあればよかった</li> </ul>